

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

- 25周年記念事業 ネパールからカマル・フヤルさんを招いて
地球の木講座「カマルさんが語る震災復興」…………… 1
- 社会参画をめざす参加型学習～アクティブ・ラーニング～…………… 2
- みんなの声をまちづくりに活かす～思いを形に変える～…………… 3
- カマルさんを我が家にお迎えして…………… 3
- 支援地から カンボジア/ラオス/ネパール…………… 4,5
- 25周年記念事業“日本の中のラオスに出会う”小さな旅…………… 6
- 4年目を迎えた日朝大学生交流…………… 6
- 気仙沼だより その15…………… 7
- 地球の木で活動する「私の場合」…………… 7
- 活動日誌(9～11月抜粋)…………… 7
- INFORMATION…………… 8

◆◆◆地球の木25周年記念事業◆◆◆

ネパールからカマル・フヤルさんを招いて

地球の木は、25年の間に多くの国内外のNGOの人たちから国際協力について学んできた。中でも大きな影響を受けたのが、参加型農村開発を実践してきたネパールのパートナー、カマル・フヤルさんである。支援のあり方をはじめ、地域の文化を尊重することや、共に働き、楽しい場を共有することの大切さを教えてくれた。地球の木の節目の行事にネパールから駆けつけ、参加者にたくさんの気づきと感動を届けてくれた。



地球の木講座

「カマルさんが語る震災復興」

9月25日、鶴見中央コミュニティハウスで行なわれた講座には、20代から70代と年齢もさまざまな約40人が集まり、熱心に耳を傾けた。内容はネパールの復興状況に留まらず、どこの国でも共通する社会生活のあり方などにもおよび、私たちの社会を振り返る良い機会となった。

震災復興に効果を発揮！ 住民参加の計画づくり

ネパールのある村で起こった話が紹介された。その村は大地震の後、多くの住居が崩れ、援助がないまま孤立していた。そんな中、村の人たちは助け合い、支え合って暮らしていた。しかし、大きな援助が入った途端、村人の中でいさかいが始まったという。収拾がつかなくなった現地のNGOはカマルさんに助けを求めた。農村開発の時にに行なっている参加型手法をすぐに適用。村をみんなで歩きまわり、被害を記録し、地図を作った。地図を見ると誰に支援が必要なのかは一目瞭然である。そのうち争いごとは収まり、村人たちは一丸となって村の復興に力を合せているとのことだ。

地球の木の支援地マンガルタール村でも多くの関係者と共に慎重に復興支援を進めたことにより、大きな混乱はなかった。12月に状況調査を行い、大地震後の活動計画を立てる予定だ。

幸せとは？

カマルさんは、「幸せ分かち合い」、つまり幸せな時を一緒に過ごしながらか共に活動する大切さを広めようとしている。会場から、幸せはどのように確認できるのかという質問が出た。ネパールには「わかるは口から、幸せは目から」ということわざがある。知識を得ようとすれば話を聞けばわかり、人が幸せかどうかは見ただけでわかるという意味だ。幸せを測るのは難しいが、これからも幸せとは何かを追求していきたいと述べた。

参加者からは、「『幸せ分かち合いムーブメント』はネパールでも日本でも共通の目標になる』『『開発』と『幸せ』をつなぎ合わせているのが新しい発想で感銘を受けた』などの感想があった。現場で幸せを分け合うには 自らが善き人でなくてはならない、と最初の出会いで学んだ言葉を噛みしめながら、地球の木の次のステップに活かしていきたい。

(ネパールチーム 丸谷 士都子)

日本は開発が進んだ国？

「『開発が進んだ国』と聞くと皆さんはどのような国を思い浮かべますか。アメリカやイギリス、日本などでしょうか。それでは『開発途上国』はどうでしょうか。アフリカ、アジアの国々、ネパールも入りますか」とカマルさんは問いかけた。

次に図を見せ、開発の指標は経済やインフラ整備に重きが置かれているが、社会、環境、文化を指標に加えると、開発の定義は全く違ってくる。経済やインフラは「便利さ」につながる要素であり、後者は「幸せ」につながる。二つの要素のバランスをとる必要があると指摘した。

ネパールの村の助け合いの風習を例に挙げた。人が亡くなると、知らせなくても30分後には200～300人の村人がお葬式の手伝いやお悔やみのために集まるという。このような助け合いの精神が豊かな社会を支えている。

社会参画をめざす参加型学習

～アクティブ・ラーニング～

9月22日



カマルさんの今回最初のワークショップは、川崎のアートスクエア木月でK-DEC(かながわ開発教育センター)と共催で行われた。昨今、文科省の推奨下に教育界で注目を集めている「アクティブ・ラーニング(*)」を取り上げ、それが形だけではなく、社会と向き合い関わる「参加型学習」となるにはどうしたらよいか、カマルさんの活動にヒントを得ながら、K-DECの理事で高校の社会科教員の風巻浩さんと共に考えた。

(*)アクティブ・ラーニング:教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法のこと。

初めに、カマルさんがネパールの統計資料を用いながら、トイレよりも携帯電話の方が普及しているといった今のネパール社会の特徴や、新憲法下での新しい教育制度について話してくれた。その上で、ネパールの村落に都会の学生たちを連れて行っているPAPA(良い点に注目した計画づくり)といわれる活動を参加者全員で行なった。階層ごとにグループを作り、村のいいところを挙げ、村がよりよくなるためにはどんな夢を描けるのか、自分たちにできることは何かを考える。課題ではなく「いいところを見つけること」から始めるという発想が新鮮だったという参加者の感想が多く聞かれた。

次に、風巻浩さんの考える教育現場でのアクティブ・ラーニングの段階を、学習活動の主体が教師ではなく子どもになっているか、教室内の知識にとどまらず社会に関わる活動になっているかによって分類する視点が示された。また、グループに分かれ、神奈川県でこの10年間に失われたもの、入ってきたものを書き込む活動を行なった(写真右)。作業の過程で地域の変遷を客観視でき、互いに課題を共有できる。

最後に「カマルさんは幸せ分かち合いを開発の現場でやっているが教育も同じだ」と風巻さんが話していたが、アクティブラーニングといった新しい言葉に踊らされずに、仲間と共に夢を描き、その実現をめざして少しずつ実践していくことが、開発にも教育にも共通する幸せ分かち合い運動なのだと気づかされた。(ネパールチーム 磯野 昌子)



カマルさん招聘プログラム		
月日	プログラム	会場
9/21	モモ(ネパールの餃子)と餃子で歓迎会	東戸塚地区センター
9/22	K-DEC共催ワークショップ「アクティブ・ラーニング:社会参画をめざす参加型学習」	アートスクエア木月
9/25	地球の木講座「ネパールの開発の第一人者カマル・フヤルさんが語るー震災復興」	鶴見中央コミュニティハウス
9/27	ワークショップ「みんなの声をまちづくりに活かす～思いを形に変える～」	藤沢市六会市民センター
9/28	高校生とワークショップ	新羽高校

みんなの声をまちづくりに活かす

～思いを形に変える～

9月27日

藤沢市の六会市民センターで、「まちづくり」をテーマにしたワークショップが実施された。参加者は「地球の木という名前に興味を持った」という当日申し込み者や「まちづくり推進」に取り組む中高年層の地元民ら総勢24人。

当地を訪れるのは3回目と言うカマルさん。「まち並みはずいぶん変わりましたね。ここに来る度に新しいことを学びます。このワークショップでは私の経験を共有し、皆さんからも教えてもらおうと思います」と、ファシリテーターとしての説明と「地域開発とは幸せを分かち合うこと」との持論を改めて強調した。

そして、地元でのまちづくり推進の現状を聞いた後に4班に分かれた各グループに対し、「住んでいる地区で良いものを10点挙げてください」と持ち掛けた。そのあと、「まちで改善したいところは何か」、「5年後にはどんなまちにしたいか」、「それを実現するためにはどうしたら良いか」と次々と出される課題。当初は「ワークショップは初めてなのでどうしてよいかわからない」とか「住んでいる地区に何か良いところはあったかしら」などと口にしていた参加者たちは、互いに打ち解けるとともにワークショップの面白さに笑顔が広がり、時間切れになるほどの熱心さだった。

アンケートでも「生き方、考え方のヒントをいただいたが気がします」(70代男性)や「人口減、高齢化に伴うコミュニティのあり方、行く末に憂いつつ参加しました。自分たちの問題、解決、参加方をこんな風に積み上げていくのだということがよくわかりま

した」(60代女性)が寄せられた。

カマルさんは「皆さんが話し合ってまとめたアイデアや思いがどんな形となっていくのか、5年後が楽しみです」と締めくくった。その後は、堀理事特製のネパールカレーを食べながらの懇親が制限時間いっぱいまで続いた

(ネパールチーム 野崎 俊一)



カマルさんのアドバイスでまちづくりの夢がますます広がる

カマルさんを我が家にお迎えして～「家」を開くことは「心」を開くこと～

「オイシイデス！」カマルさんは、用意した白御飯と味噌汁ときゅうりの漬物を、本当に美味しそうに平らげて下さいました。短い間でしたがカマルさんと過ごしたことで、遠いネパールという国が我が家にとって俄然身近な国になったことは間違いありません。

最寄駅で初めてお会いして、ちょっと緊張しながら二人で家まで歩きました。私が、「家までは駅から10分ほど歩かなくてはなりません。」と言うと、カマルさんは、「ネパールでは歩いて1時間でも『近い』と言いますよ。」と笑って下さり、ほっとしました。紅茶を飲みながらネパールの事をいろいろ教えていただきました。地震の話や、家族の話、カマルさんは日本の梅干しが大好きなこと、ネパールの人々の日常の様子など、思いつくままに話が続きまして。たまたま東日本大震災の写真集があったのでお見せすると、津波の被害の写真を熱心にご

覧になっていました。カマルさんは日本語もかなりお上手で、夫も一緒に話の輪に入り、和やかに楽しくあっという間に時間が過ぎていきました。

今日、もしネパールのことを知りたければ、インターネットなどで簡単に膨大な量の知識を得ることができますが、そういう知識だけでは、ネパールに暮らす人たちに思いを寄せることは難しいのではないのでしょうか。知らない外国人の方を自宅に迎えるというのは、誰にとってもかなり勇気のいることかも知れません。でも、「家」を開くことは「心」を開くことに似ています。ホームステイが与えてくれる貴重な時間を、ぜひ多くの方にも経験していただきたいと願っています。カマルさんをお迎えする機会を与えてくれた地球の木に、心から感謝しています。

(港北区会員 滝口 みち)

*滝口さんは通訳のボランティアもしていただきました。

 from Cambodia

蚊帳バッグ「スマテリア」のこと

地球の木が展示会やイベントで販売しているカラフルで丈夫な蚊帳バッグをご存知ですか。このバッグはカンボジアのフェアトレードブランド「スマテリア」の製品です。地球の木のCWCC(カンボジア女性緊急救済センター)の支援を担当している古田さんは女性起業家で、この「スマテリア」の日本での輸入販売をしています。今回はそのフェアトレードにまつわる報告です。



◀工場の様子

この9月に「スマテリア」の日本のスタッフをカンボジアへ「研修旅行」に連れて行くことができました。

日本でフェアトレードの仕事を始めて8年目。販売してくれるスタッフには全員カンボジアの生産者を知ってもらおうということを目指していました。ですから彼らが現地で生産者と交流しているのを見た時は感無量で、今までの徹夜の日々や、大きな荷物を白い目で見られながら電車で運んでいた思い出が走馬灯のように頭の中を駆け巡り涙が止まりませんでした。

「スマテリア」はイタリア人がカンボジアで立ち上げたブランドです。最初は家のガレージから始まりましたが徐々に大きくなり、今は1軒家を借りて生産しているのです。家の屋上が保育園になっていて、お母さんたちが働きやすい環境になっています。毎回、工房を訪れるたびに、誰かの家にお邪魔しているような心地よさがあります。日本の「スマテリア」もそんな会社でありたいと、スタッフとの距離は近く保つ事と、年齢性別ではない個性を大切にすることを心がけて運営してきました。気がつけば、今回の旅の最高齢は67歳、最年少は20歳。3世代にわたるスタッフが、夜ビール片手にわいわいとフェアトレードについて話っていました。

バッグのデザインの話になると、好みもニーズも全く違うのですが、20歳の学生スタッフは「僕らの世代の男性でも欲しいデザインがあります！」と意見してくれます。こちらは「ストラップが細すぎる」「重い」「色が派手すぎる」とダメだし。そしてこの様な議論の末に性別、年齢、文化を超えて愛されるブランドができればなあと大きく夢が膨らんだ研修旅行となりました。

地球の木のフェアトレード商品もこれからだと思えます。生産者とお客をつなぐ役割だからこそ商品についてあれやこれや議論して、どんどん良い商品を作っていきたいです。これからはどんどん変わっていくフェアトレードの業界ですが、地球の木でも常に新しいカンボジアの魅力を少しでも伝えられればとフェアトレードの商品を紹介しています。デポー展示会などでご覧になる機会があれば是非お手にとっていただければと思います。(理事 古田麻利子)

 from Laos

敷居の低さと生きやすさ

地球の木の会員のみなさま、はじめまして。日本国際ボランティアセンター(JVC)ラオス事業現地駐在員の山室良平と申します。6月に入職し、東京事務所での研修を終え、9月11日に現地駐在員としてラオス事務所に赴任いたしました。今回は自己紹介とラオスの印象、抱負を書かせていただきます。

1990年生まれ、千葉県佐倉市出身の26歳です。大学・大学院では地域、集団、民族間の関係について専攻していました。その傍らインドへ単身バックパッキングに行き、他の社会、異文化のなかで生きている人たちと直に関わることのおもしろさを知りました。そしてグローバル/ローカルな排除・搾取・無関心の構造に対して「現場でなにかしたい」と思い、国際協力に携わろうとしていたところ、JVCラオス事業と出会いました。

あらゆる人に教えてもらいながらラオスや村について学び、ラオスの人々のため活動していきたいと思えます。赴任後さっそく、ラオスの人と人とのつながり、そし

てそれらに基づいた数字やお金では測れない「生きやすさ」について見る機会がありました。

赴任4日目、ラタン(籐)栽培活動で村に行くことになりました。レンタカーで活動対象のピン郡の村まで行き、村人のラタンの苗の保管小屋を建てる作業を手伝うためです。このとき、レンタカーの運転手のおじさんも、日光と雨をよけるためのネットを針金で取り付けなどの作業を手伝ってくれました。作業がひと段落すると、そばにある丸太に座って村人と世間話をしています。もともとの知り合いではないようです。

別に作業を頼んだわけでもなく、ましてやそういった契約をしたわけでもありませんが、運転手のおじさんは自然と参加してくれているようでした。また、村人たちもそれほど特別なことと感じてはいないようです。日本の感覚では、「自分には関係ない」から手伝うことも世間話をするこも無い、と考えてしまうかもしれません。ラオスには、他人であっても気軽に助け合おうという人



ラオス人スタッフと事務所の草刈りをする筆者(左)

が多いのではないかと思います。農村部では物質的に余裕がある人は、決して多くはないかもしれませんが、こんな敷居の低さと生きやすさがあるのではないかと思います。この人々の中の低い敷居の中に入ることでラオスの多様な面を知り、活動に活かすよう努めていきたいと思えます。

(JVCラオス現地駐在員 山室良平)

 from Nepal

秋のネパールは祭りの季節

ナマステ！秋のネパールは祭りの季節。ダサイン祭りの半月後にはティハール祭りがやってきて皆、気もそぞろです。

プログラムの進捗状況をお知らせします。9月14日ラジャバス高校で「子どもの日」の集いがありました。25日にはカルパチョーク村で小学校教員と生徒が植林。昨年4月に大火事があった森に150本の苗木を植え、100本は村人たちに配りました。27日には今年度2度目の作文コンテストを開催。マンガルタル高校の9、10年生17名が参加しました。題目は「あなたの人生の目標」で、優勝者はビジャナ・ラマ君とスジャータ・カティワタさんでした。また29日にはマンガルタル高校のダサイン祭りに特別ゲストとして招かれ、新11年生の奨学生たちに「幸せ分ち合いムーブメント」のプログラムを紹介し、参加型開発の話をしました。

特筆すべきは、ラジャバス高校のSLC(高校卒業資格国家試験)の結果です。昨年、不合格者が出たため、学校運営委員会、先生、保護者と生徒で対策を話し合い、特別ク



育て森！育て子どもたち！(左がサルバジットさん)

ラスや個別指導を設けることにしました。毎週テストをして、習熟度の低い生徒をレベルアップし、先生たちも個別指導に当たるなど皆で力を合わせ、今年全員が合格しました。山のとっぺんにあるラジャバスには、食堂やカフェ、店、ギャンブル場がなく、道路・市場から遠いこと、先生たちが近くに住んでいて、生徒の相談にのられるなど、勉強に集中できる環境が整っていることも成功の要因だったと思います。

(SAGUNスタッフ サルバジット・ラマ)

●復興支援情報

エンジニアのナビンさんから、9月初旬に復興支援第3弾のラーニングセンターに関する情報が来ました。

この復興支援事業は、村で入手できる砂・砂利・石などの材料は村で調達し、セメント・鉄骨・トタン板などの建材はSAGUNが調達するという方式を取っています。

パンACHE地区のチャトレピバル小学校は完成し、ラジャバス地区のブメスタン小学校では、鉄骨とコンクリート部分が完成しましたが、屋根にトタンを張る作業が残っています。

1ヵ月経って、そろそろブメスタン小学校も完成したかな…とメールで問い合わせしてみると、10月はダサイン祭りで会社も学校も皆お休み。職人さんは来てくれないし、どうにも前に進まないというお返事でした。ネパール人は本当にお祭り好きなのですね！

(ネパールチーム 乳井京子)



ラーニングセンターができた！(かながわ国際交流財団の助成を受けています)

“日本の中のラオスに出会う” 小さな旅

「在 日本ラオス文化センター」を訪れてみませんか。そんな呼びかけに応え、10月16日(日)早朝、海老名駅バス停に集まったのは文字通りの老若男女20人。センターのある愛甲郡愛川町まで30分バスに揺られ、そして更に秋色濃い畑の広がる小道を行くとカラフルな建物が見えてきた。

その日行われたのは「オークパンサー(出安居:であんご)」といって、3か月間僧侶が閉じこもってする修行の最終日に行われる盛大なお祭り。民家を改装して作ったこのセンター兼寺院は道路沿いにあり、辺りいっばいに音楽が鳴り響く中、着飾って花や食べ物の供物を抱えた人たちが続々とやってくる。今年新しくできた大きな門、壁画、庭先にしつらえたミニパゴダや涅槃像など、すべては在日ラオス人のみんなの知恵とお金と労

力の結晶だ。

室内でのお坊さん(2人ずつ3か月毎に呼び寄せているそう)の読経の後、長い行列を作ったの托鉢、そして主だった人たちの挨拶があり、民族舞踊も披露された。そしてラオス料理の昼食がふるまわれ、そここでの歓談、三々五々での写真撮影。飛び回る世話役の人。どの場面でも、ラオスの人たちのおおらかさを感じ入る。センターを運営するのはNPO法人在日本ラオス協会。お祭りの後、子どもたちのラオス語教室も開かれていた。

センターのすぐそばには大きな公園墓地があるが、そこに通う筆者は、実は前から「周囲の風景から浮いているハゲな寺院風建物は何だろう」と思っていたのだ。仏像の山吹色も、車の塗装関連の仕事をしている人が金色に近づけるのにとっても苦労したとのこと。センター建造物のすべてが、インドシナ難民(*)として日本にやってきて定住したラオスの人たちの苦労と喜びを具現しているようであった。

(会報作成チーム 斎藤和子)

*インドシナ難民: 1975年ベトナム戦争終結後、インドシナ三国(ベトナム、ラオス、カンボジア)は社会主義体制になり、迫害や混乱を逃れて多くの人々が国外に脱出した。日本政府は1978~2005年にかけて約11,000名のインドシナ難民を受け入れた。内ラオスは約1,300名。



ラオスから招いた僧侶たち



さまざまな民族衣装をまとい踊る女性たち

「南北コリアと日本のともだち展」

—— 4年目を迎えた日朝大学生交流 ——

核 実験やミサイルの実験を繰り返す北朝鮮。緊張が高まる中、今年の夏も平壤で「南北コリアと日本のともだち展」の日朝大学生交流が行われた。今年は、広島、そして沖縄出身の大学生も参加した。「平和」について敏感な彼らが北朝鮮の大学生と核やミサイルのことについても議論した。「核は米国の脅威から国を守るために必要」と平壤外大の学生。日本語の授業の一環として、被爆者のドキュメンタリーや「はだしのゲン」も見たという。広島出身の大学生は、曾祖父が被ばくした体験を話し、「非人道的な核は廃絶しなければ」と訴えるが「それならアメリカの核も。世界中の核がなくなれば我々にも必要ない」と話は平行線をたどる。国の話になると表情は硬くなり、決して意見を変えようとはしない彼らだが、若い世代同士、その他の場面では、スマートフォンを見せ合い、ゲームや恋バナで盛り上がり、心の距離はどんどん近くなっていく。別れの日、彼らは涙を流しながらいつまでも手を振り続けていた。

昨年に引き続きこの交流に参加した日本の学生が、同じ

く2年連続参加した平壤外大の学生と一緒に話したことは「この別れの辛さを次の世代に残したくない」。日本と北朝鮮で、それぞれジャーナリストになって両国の関係改善のために働き、そして再会しようと約束したという。不安定な状況になっていく東アジア情勢だが、この若者たちの「出会い」が実を結んでいくような日が来ることを願わずにはられない。(「ともだち展」事務局長 筒井由紀子)



龍岳山でワークショップ

これからの 支援の在り方を考える

震災から5年が経過。これからの支援のあり方を考え、また11月に行われる復興支援まつりを控え、被災地の復興、支援状況を共有する機会として、まつりの幹事会メンバーにも声掛けし、8月はじめ、女川駅周辺、雄勝地区、南三陸町を経て気仙沼へと視察・交流を行なってきました。

2014年に訪ねた気仙沼市立小原木中学校仮設で、小物づくりをしていた「よってけ工房」代表の千葉さん宅におじゃましてお話を伺いました。仮設に在る時は不自由ではあったが皆一緒に和やかにやって来たのに、仮設を出る段になって、個々の状況の違いから格差が生じてしまうことに戸惑いを感じている事。この様なことはなかなか地域の人にも話せない苦労があるとの事、新たな問題が出て来ているようでした。気仙沼港周辺の道路はかさ上げ工事が進み、住宅地と港の間に10階以上の高層住宅がまるで防潮堤のように造られていたことがこの地域の平地の少なさと被災者の多さを示しているように感じました。高層入居者は外出しなくなっていく人も多いそうです。

Tree Seedの今後の活動は、学校等の公的な敷地に建てら



高層の復興住宅

れた仮設住宅の統廃合が進み、仮設から仮設へ何度も引っ越しをしなくてはならない人も出て来て、近所付き合いもなかなか難しくなっていることから、震災直後から行っている五右衛門ヶ原運動場の仮設住宅の皆さんを訪問しての安否確認を継続。また運動場が思うよう使えずにいた子どもたちのスポーツ指導の活動をさらに進めて行くことなど、代表の小野寺さんから説明を受けました。

(副理事長 堀 千鶴)

真っ白な雪をいただくヒマラヤの国ネパール。ネパールという国にはそんなイメージしか持っていませんでした。亡くなった松井やよりさんの著書『私たちのアジア』を読んだときの驚きは忘れません。「ネパールの女性たちはこんなに虐げられている！」。

ちょうどその時、「地球の木」のネパール支援が始まったことを知りました。ネパールプロジェクトの人たちはどのような話し合いをしているのか、興味津々でなんぶランチの会議に参加させていただいたのが地球の木での活動の第一歩です。

それまでも生活クラブやNET、ワークシなどさまざま会議に出てはいましたが、地球の木の会議は当時の私には新鮮なことばかりでした。初めて訪れたネパールでは、女性たちの自立のために子どもの頃から地を這うような活

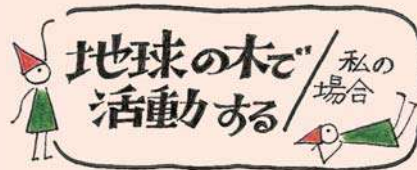
動を続けるニルマラさんという素晴らしい女性を知りました。乳井京子さんと2人だけのネパール調査ツアーはさらに刺激的でした。現地NGOとのやりとり、特に支援額

についてここまで真剣にやりとりを交わして決めるものだということを目の当たりにして大いに納得しました。

中学生と高校生にワークショップをする、という機会を与えてくださったことにも感謝しています。台本を読むだけではなく、自分の言葉で語らな

ければ、とそれこそ必死でした。

「20周年記念誌」の編集チームに参加させていただいたのは、たくさんの刺激と学びを与えてくださった地球の木への感謝の思いからです。そして編集会議の中でもまたたくさんの学びを得ることができました。(栄区会員 真矢公子)



活動日誌 (9月～11月 抜粋)

9月

- 12日 第3回理事会
- 15日・16日 デボー展示会(つづじヶ丘)
- 20日～29日 カマルさん招聘
- 24日 藤沢市民まつり(藤沢市)
- 25日 ひらつか市民活動センターまつり(平塚市)

- 16日 「日本の中のラオスに会う」(愛川町)
- 19日 第4回理事会
- 22日 デボー展示会(東戸塚)
- 27日・28日 デボー展示会(みたけ台)

10月

- 1日・2日 グローバルフェスタJAPAN2016(お台場)
- 8日 よこはま国際フェスタ2016(みなとみらい)
- 9日 なか区民活動センター祭り(横浜市中区)
- 15日～19日 カンボジア視察(筒井・堀)

11月

- 13日 かまくら国際交流フェスティバル2016(鎌倉市)
- 19日 東日本大震災・復興支援まつり(山下公園)
- 23日・26日 オルタ館フェスタ(新横浜)
- 28日 デボー展示会(らいふたうん)
- 28日 第5回理事会



地球の木カレンダー2017

★「輝く瞳」好評発売中!★

毎月めくるたびに気持ちがあたたくなるカレンダー!

戦後から現代まで時代ごとの子どもたちの輝く瞳が印象的なカレンダーです。写真家:田沼武能
 購入ご希望の方は、地球の木事務局までご連絡ください。ホームページからも受け付けています。
 サイズ:壁掛け:32cmX38.5cm(使用時60cmX38.5cm)
 卓上:15.5cmX17.8cmX7.5cm
 制作元:日本国際ボランティアセンター(JVC)
 価格(税込):壁掛け:1,600円 卓上:1,300円

イベント情報

■よこはま国際フォーラム2017

2017年2月4日(土)・5日(日)

11:00~19:00 場所:JICA横浜

地球の木のラオスワークショップ

「森を守る・暮らしを守る」は、5日(日)

11:00~12:50 4Fやまゆりにて行ないます。



■第16回南北コアと日本のともだち展

2017年

2月17日(金)~19日(日)

場所:アーツ千代田3331

がんばる笑顔を支援しよう!

~幸せ分かち合い年末募金~



皆さまの日頃のご協力に心より感謝申し上げます。今年も残りあとわずかになりました。

ネパール、カンボジア、ラオス、気仙沼の人たちと、幸せを分かち合えるよう、皆さまからのあたたかい募金を何とぞよろしくお願ひ申し上げます。

詳細は同封のチラシをご覧ください。



●寄付金領収書について

地球の木は認定NPO法人です。皆さまからいただいたご寄付は、確定申告によって所得税、法人税などの寄付金控除の対象となります。申告には地球の木が発行する領収書が必要です。2016年にいただいたご寄付につきましては、2017年1月末までに領収書をお送りいたします。

また、地球の木ではサポート会員の会費も寄付金控除の対象となります。サポート会員の会費はご連絡いただいた方のみ領収書をお送りしておりますので、領収書の必要な方は事務局までご連絡ください。



何かが変わるふれあいの旅

ネパールスタディツアー2017

雄大な自然に抱かれた地球の木の支援地の村を訪ねます。

2015年4月の大地震で多くの家屋や建物が破損しました。

地球の木はすぐに支援を開始し、テントや医薬品、仮設シェルターを提供しました。その後の村の暮らしは? 復興の様子は? 村に滞在して、村の人たちと触れ合い、より安心できるコミュニティに必要なことが何か、語り合ひましょう。



●2017年2月22日(水)~3月2日(金)

●訪問地:カトマンズと支援地の村

●申し込み締切:2017年1月23日((月))

*詳細は地球の木事務局まで資料をご請求ください。



特定非営利活動法人

地球の木



「ワークショップの進行役は、いつでもどこでもいい人でなくてはならない」というのがカマルさんの持論。妻に対しては良き夫、息子に対しては良き父であることを実践している。「ダルはいつも私の担当」と作ってくれた豆のスープ。どうにも止まらないおいしさだった! (K.N)